

NEW

浮流星

号 外

発行: 2002. 9. 1

編集: SUNAK FILM

発行 MAKER

SUNAK FILM MAKER

Eメール: planet-sunak@ml.reset.jp

特集 アートフィルム作家

アートフィルムフェスティバルVol.1

2002.9.1 at Nakano ZERO [Traditional Avantgard and FILMS for Fine Art]

作家プロフィール 今回上映する作品の内容、解説 アートフィルムについての作家の考え方。

原田 剛 はらだ ごう

1963年、東京生まれ。1993年～1999年まで、ドイツ・フランクフルト、シュテッデル・シュレーにてペーター・クーベルカ (Peter Kubelka) に師事。現在東京に在住。

「ブルーフィルム (BLAU FILM)」2001/16mm color silent / 10分

14,000通りのブルーのイメージ。

カメラによる撮影を行わず、切れ目の無い16ミリの素抜けフィルムをベースとし、手作業で個々のイメージを作成。

使用ピグメント: フロイセン・パリ・ブルー

アートフィルムでは「アート」をしようと考えないことが重要。

大谷 淳 おおたに じゅん

1960年大阪生まれ。兵庫県西宮市在住。1985年、関西医科大学卒業。同年より、精神神経科勤務医として、働いている。1976年より、映像制作を始め、現在までに、19本の作品がある。日本・世界各地での、個人/実験映像の各種グループ展に多くの出品歴があり、時には、個展や二人展もやってきた。1983年から1996年の関西を中心としたヴォワイアン・シネマテークにも参加し、個人/実験映像の上映活動も行ってきた。1987年より、個人/実験映像の批評を中心にした個人誌として、「月刊ツヴァング通信」を毎月発行している。日本の個人/実験映像界での、過激な批評家・ジャーナリストとしても、知られている。

「白い部屋 1」2001/16mm monochrome silent / 13分

白黒の16ミリ高感度フィルムを用いて、フィルムでなければ出来ない質感を狙った、サイレント映画である。手ブレのある、手持ちカメラで、天井と壁を撮った。この作品は、固定カットとパンニングのカットだけで、構成されている。私は、画面の中で、天井や壁の凸凹（でこぼこ）のぶつぶつ（ブツブツ）がランダムにうごめくフィルムの粒子と、交錯する瞬間をめざした。

表現・芸術をめざして作られた映画・映像を、全てアートフィルムだと考えている。私は、個人／実験映像の制作・上映・批評活動をやっており、その立場の人間だが、ミニシアターなどで上映される商業映画でも、表現・芸術をめざして作られている映画は、アートフィルム（芸術映画）に入ると考えている。

太田 曜 おおた よう

1953年東京生まれ。1974年日本大学芸術学部美術科（彫刻専攻）入学
1977年～1987年パリ第8大学映画科でギィ・フィマン、クローディーヌ・エジックマン、フランクフルト、シュテーデル美術大学でペーター・クーベルカに実験映画を学ぶ。
1988年～東京造形大学等、非常勤講師。1997年～実験映画の研究と普及のため MALTESE CROSSE VISION を設立。

映画が画面上に生成する"非日常的空間と運動"による映画、非物語的展開の映画が作り出す"映画の"時間経過を"見る"映画を制作。

実験映画の制作と平行して"実験映画／個人映画／自主映画"等の非映画産業的映画の上映にも関わる。MALTESE CROSSE VISION 代表。

「UN RELATIF HORAIRE」1980/16mm color silent / 2分

パリ・セーヌ河の観光船バトームーシュから街の夜景を撮影した。撮影が終わって、フィルムを全部巻き戻し、空のところに満月の月を多重露出で撮影した。"夜歩いていると月が追いかけてくる"月は空の上で余りにも遠いので、いつもその位置が変わらないかに見える。それは、船から見ても同じなのだろうか？しかし、ここでは船は旋回しているのだ。時間は空間の中で運動の関数だが、この作品ではそれを視覚化しようとした。

「INCORRECT INTERMITTENCE」2000/16mm partcolor sound / 6分

一旦カラーフィルムで撮影された元の映像からは、カラーとモノクロームの二本のラッシュが取られ、それは完全に数学的規則性による間欠／断続によって編集され最終上映プリントがオプティカルプリンターの再撮影で作られた。こうして制作された映像が、映画として現れるスクリーン上の画面では、誤った或いは正しい間欠／断続によって作られる見かけの動き（仮現運動）があるだけだ。ここで行ったことを間欠／断続（intermittence）の誤り（incorrect）と見るか、映画的時間操作と考えるかは、映画を現実の記録再現を元にした複製技術による表現ととらえるか、映像によるスクリーン上の造形と考えるかとも関わっているのかもしれない。

私の師、映画作家のペーター・クーベルカは"私が実験映画を作っている訳ではない。彼等が商業映画を作っているのだ。私は映画を作っているだけだ。"と言っています。私もほぼ同じ考えです。

吉永 晋吾 よしなが しんご

1976年生まれ。東京造形大学卒業 2001年ZOKEI賞 2001年イメージフォーラム、ヤングパースペクティブ上映

「THE INFECTION ROUTE No2」2001/16mm color sound / 10分

フィルムを自家現像することにより、フィルムの質感、手触りをより強く表現した作品、8割が8ミリから16ミリへのブローアップであり、画質の違いを作り、また、フィルムを直接、切ったり燃やしたりパンチで穴を開けたことにより、フィルムの物質性を表現してみました。

アートフィルムが何を指しているのか、雑多な意味が混在しており、一言でいいあらわすことは難しいがフィルムに直接アプローチする方法、技法、などにアートの匂いを感じます。

伊藤隆介 いとう りゅうすけ

1980年代より主にフィルムを中心に作家活動を始める。東京造形大学で、かわなかのぶひろ氏のもとで、日記的映画制作を学び、シカゴ美術館付属大学大学院でマテリアルとしてのフィルムを学ぶ。現在は主にフィルムによる「版」シリーズとビデオインスタレーション作品（閉鎖回路）の作品を制作。受賞は米ブラックマリア映画祭、イメージフォーラムフェスティバルなど。

「版#13、#14、#12及び#10」2001/16mm color sound / 7分

廃材としての映画フィルム（市販、あるいは廃棄されたもの）をコラージュした"原版"を作り、そのイメージをフィルムにダイレクトに焼きつけた「映像版画」です。プリント毎にパーホレーションとイメージの位置や音声（これもイメージを映写機が読んだノイズ）が変わります。

表現としての「映画」はその物質性を通して、テープメディア（たとえばビデオ）とは違う「フィルムである必然性」その主張が今や問われていると思います。僕にとってのそれは、ライブが身上の「ビデオ」に対し、「映画」が「時間」を秒24スライスに千切りしてゆくということです。千切りした材料は様々な「料理」することができます。つまりハサミとノリを使えるということです。

末岡一郎 すえおか いちろう

1965年生まれ。1985年から短編映画製作開始。現在までに73作ほど制作。実験映画から見た映画史をテーマにしたクリティカル・フィルムを制作している。国内外での上映多数。2002年にはカナダの映画祭「メディア・シティ8」にて特集上映されると共に、審査員も担当する。現在、FMIC（フィルムメーカーズ・インフォメーション・センター）の設立を準備中。

作品歴：[Lust und Leid hoch drei] (99), [A flick film in which there appear Liz and Franky, is composed under the score of ARNULF RAINER by P. Kubelkaon NTSC.](00), [SCENE MISSING (film installation,)] (01), [Sophie,Miserable Now](02)

[スプロケットの穴やエッジレタ - はないが、ゴミはある映画] 2002/16mm color/ 5分

"A Film in Which There did NOT Appear Sprocket Holes, Edge Lettering without Dirt Particles"

この作品はジョ - ジ・ランドウ(1944-)の代表作「スプロケットの穴やエッジレタ - 、ゴミなどがある映画」(Film in Which There Appear Sprocket Holes, EdgeLettering, Dirt Particles, etc.)を参照している。

ランドウはフィルム・マテリアルの事実に関心を寄せている。色見本のカラーチャートと女性の映像、画面中央に現れるスプロケット・ホールやエッジ・ナンバーといった事は、プロダクト上の記号として、通常の映画にも存在しながら、決して私たちはそれらを目の当たりにすることはない。つまり、私たちは見せられるべく選択された一部を鑑賞しているのに過ぎないのだ。

ここでは、そうした事実を指摘しつつ、その事実を隠蔽する事によって逆説的に「フィルムの事実」を示すものである。

西村智弘 にしむら ともひろ

1963年生まれ。1990年、第13期イメージフォーラム映像研究所修了。在学中から作品の制作をはじめ。1993年、美術出版社主催「第11回芸術評論」に「ウォーホル/映画のミニマリズム」で入選。以後、美術評論家、映像評論家として活動を開始。

主な個展に、「回転表象」(東京、2001)、「青い歩道橋」(東京、2002)など、参加した映画祭として、「screening JAPAN」(コペンハーゲン、2000)「ImageFestival」(トロント、2001)などがある。

「青い歩道橋」2002/16mm color/ 5分

歩道橋の内部で撮影した360度の回転運動を反復させ、そこにズレをともなった同一パターンを重ね合わせている。ズレの法則はあらかじめ決定されているため、どのような変化が現れるのかはできあがるまでわからない。この作品では、同一の反復に規則的なズレを与えることによって、自分でも予測がつかないような視覚的なパターンの生まれることが期待されている。

SUNAK星人 SOS SOS! =CINEFILM AS MATERIAL OF PLASTIC ART=

「映画の基本技術は手工業的なものだ!」

撮影だけでなく、現像や映写まで行なうことを考えれば、絵画や彫刻のような個人による芸術表現の媒体として"映画"を考えたときには、フィルムも造形の素材として、直接手で扱うことも出来る。映画産業の現像所が、"失敗、事故"と名付けているような映像さえも、作家の表現として取り込んでしまう。映画フィルムを造形の素材のように使って行なう表現には禁忌も限界もない。

(太田 曜氏「造形の素材としての映画フィルム」より抜粋)

< 映画の既成概念をプチ壊そう! >

一般の映画: ストーリーがある。撮影する現像: 失敗・事故はダメ、映画館で上映・スクリーンに映写する。
アートフィルム: ストーリー無で表現する。撮影しない(カメラがいらない)フィルムの露出で表現する。
一般的に現像の失敗とか事故によるフィルムこそ芸術表現。場所を選ばない。どこでもOK! 何にでも映写できる。観客が見られる場合がある(スクリーンから覗かれる。)以上のように、映画の既成概念にとらわれずに、作家の自由な芸術表現ができる, ART FILM...「既成概念」をプチ壊すこと、プチ壊すことによって、新しいものを"作る""生まれる"。つまり、映像レボリューション=映像革命だ! (SUNAK星人)